

〈他の排除 (anyāpoha)〉の分類について
 —Śākyabuddhi と Śāntarakṣita による 〈他の排除〉の3分類—

石田 尚敬

I. はじめに.

仏教認識論・論理学の創始者 Dignāga (ca. 480-540) によって、初めて詳細に説示されたアポーハ (apoha) 論は、仏教認識論・論理学の大成者 Dharmakīrti (ca. 600-660) による発展的解釈が施された後も、インド仏教最後期の Mokṣākaragupta (13C) に至るまで、一貫して保持されたことはよく知られている。アポーハ論研究は Frauwallner [1932] を嚆矢とする個々のテキストの文献学的研究と、Mookerjee [1935] によって提示されたアポーハ論の3段階発展説を検討・修正するという思想史的研究の両面からなされてきたと言えるだろう。特に、後者に関しては、第1期の否定的アポーハ論者として Dignāga, Dharmakīrti を、第2期の肯定的アポーハ論者として Śāntarakṣita (ca. 725-788), Kamalaśīla (ca. 740-795) 師弟を、第3期の折衷的アポーハ論者として Jñānaśrīmitra (ca. 980-1040), Ratnakīrti (ca. 990-1050) 師弟を同定した Mookerjee 説に対し、小川 [1981], Katsura [1986] 等によって Jñānaśrīmitra の説くアポーハ論が基本的に Dharmakīrti の主張と変わりが無いことが指摘され、一方、Herzberger [1986], Katsura [1991] によって Dignāga と Dharmakīrti との間の差異が強調されるなど、3段階発展説は既に過去のものとなって久しい¹。また、Mookerjee 氏によって扱われなかった論師の研究も進められ、本稿との関わりでは、櫻井 [2000a], [2000b] によって Śāntarakṣita の説くアポーハ論の一部が、既に Śākyabuddhi (ca. 660-720) の議論に見られると報告されていることが注目される。以上に代表されるように、これまで数多くの研究が積み重ねられてきたが、それらを振り返った場合、Dharmakīrti の主張とそれ以降の論師の理解との等質性が強調される余り、Dharmakīrti の学説の後継者達の間で繰り広げられた議論の多様性が捨象されてしまうという傾向は、注意されねばならないように思われる。このような問題意識に関連して、近年、船山 [2000] 及び Dunne [2004] により、Dharmakīrti の孫弟子と伝えられる Śākyabuddhi が、〈他の排除 (anyāpoha)〉を3種に分類している点が明らかにされたことは重要である²。両研究ともに、Śākyabuddhi の説いた〈他の排除〉の3分類が、Śāntarakṣita を初めとする後代の論師に大きな影響を与えた点を強調している。ただし、Śāntarakṣita が Śākyabuddhi と同じ3分類の形式を取りながらも、3分類された個々の〈他の排除〉に対する取り扱い、及びそれにもとづく語意の設定等に関してはより発展的な理解をしている点、また後代の論師によって3分類が批判されている事実には触れられていない。そこで本稿では、まず Śākyabuddhi と Śāntarakṣita の理解を再確認した上で、両者の比較を行い、〈他の排除〉の分類をめぐる Dharmakīrti 以降の議論の展開を解明する端緒としたい。

II. 〈他の排除〉の3分類

1. Śākyabuddhi の説く 〈他の排除〉の3分類

1-1. Śākyabuddhi による3種の 〈他の排除〉の提示

Śākyabuddhi は、Dharmakīrti 著 *Pramāṇavārttika* (以下 PV) の全章に対して註釈 *Pramāṇavārttikaṭīkā* (以下 PVT) を残している。ただし、第1章に対しては自註 *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (以下 PVS) に対する複註であり、残りの章に対しては Devendrabuddhi の註釈 *Pramāṇavārttikapañjikā* への複註である。そのうち、PV I (svārthānumāna) 168³への自註に対する註釈において、〈他の排除〉の3分類を説いている。この部分に関しては Dunne [2004] にチベット語からの英訳があり、櫻井 [2000b] に和訳があるが⁴、Inami et al. [1992] においてサンスクリット語原典写本の断片写真とそのローマ字転写が出版されており、また、船山 [2000] が指摘する通り⁵、Haribhadra (8C) 著 *Anekāntajayapatākā* (以下 AJP) における引用によって、写本の当該箇所欠損部も大部分が回収できることから、サンスクリット語による原典テキストを復元し、それにもとづく訳を提示したい。(テキスト校訂に関しては appendix を参照)

ayam atrārthaḥ / trividho hy anyāpohaḥ / ekas tāvat vyāvṛttaṃ svalakṣaṇam eva, anyo 'pohyate 'sminn iti kṛtvā / yad adhikṛtyāha –

svabhāvaparabhāvābhyām yasmād vyāvṛttibhāginah // (PV I 40cd)

iti / ayam ca śabdalingāśrayasya vyavahārasyāśrayatvena vyavasthāpyate / na tu śabdavācyatayā / anyavyavacchedamātraṃ dvitīyaḥ, anyāpohanam anyāpoha iti kṛtvā, yaḥ sarvatrābhedena pūrvācāryaiḥ vyavasthāpyate, pratiśedhamātrasya sarvatrāviśeṣāt / vikalpabuddhipratibhāsa tu tṛtīyaḥ, anyo 'pohyate 'neneti kṛtvā, yo 'yam śāstrakārasya śabdavācyatayābhimataḥ /

ここにおいて、以下のことが意味されている。すなわち、〈他の排除 (anyāpoha)〉は3種である。まず、第1の〔〈他の排除〉〕は、排除された個別相 (svalakṣaṇa) に他ならない。「他のものがここにおいて排除される」と〔語義解釈 (vyutpatti)〕して〔そのように理解されるの〕である。それに関して〔Dharmakīrti 師によって〕述べられている。

〔すべての存在 (bhāva) は、〕自己の本質をもつもの (=同類) 及び他の本質をもつもの (=異類) からの排除を有している⁶。 (PV I 40cd)

と。そして、この〔〈他の排除〉 (=排除された個別相)〕は、語と証因に依拠する行為 (vyavahāra) の拠り所として設定されたのであり、語の表示対象として〔設定されたの〕ではない。第2の〔〈他の排除〉〕は、〔純粋な〕〈他の排除〉のみ (anyavyavacchedamātra) である。「〈他の排除〉とは、他を排除すること (anyāpohana) である」と〔語義解釈〕して〔そのように理解されるの〕である。それは、すべてのものに対して無区別なものとして、先の論師たち (pūrvācārya) によって設定されたものである。単なる否定はすべてのものに対して区別がないからである。第3の〔〈他の排除〉〕は、概念知の顕現 (vikalpabuddhipratibhāsa) である。「これによって他のものが排除される」と〔語義解釈〕して〔そのように理解されるの〕である。まさにこれが、論書作者 (=Dharmakīrti)

によって、語の表示対象であると認められたものである。

以上の記述から、Śākyabuddhi は、

- ① 排除された個別相 (vyāvṛtta- svalakṣaṇa)
- ② 他の排除のみ (anyavyavacchedamātra)
- ③ 概念知の顕現 (vikalpabuddhipratibhāsa)

という3つの項目を3種の〈他の排除〉として考えていることわかる。また、サンスクリット語の原典テキストを復元することによって、3種の〈他の排除〉に対してそれぞれ与えられた3つの語義解釈 (vyutpatti) が、より正確に理解できるだろう⁷。

1-2. Śākyabuddhi により分類された〈他の排除〉の検討

i) 排除された個別相

まず Śākyabuddhi は、第1の〈他の排除〉は個別相において成り立つと説明する。この場合、Śākyabuddhi によって、個別相が、そこにおいて他のものが排除される〈基体〉として捉えられている点に注意しておきたい。そして、Dharmakīrti との関連では、Śākyabuddhi 自身によって引用されている通り、PV I 40 が根拠として提示されている。Śākyabuddhi は一部しか引用していないため、PV I 40 全体を参照しておきたい⁸。

sarve bhāvāḥ svabhāvena svasvabhāvavyavasthiteḥ /
svabhāvaparabhāvābhyāṃ yasmād vyāvṛttibhāgināḥ // (PV I 40cd)

あらゆる存在は、本性上、それぞれ固有の性質において⁹定まっているから、自らの本質を持つもの (=同類¹⁰) 及び他の本質をもつもの (=異類) からの排除を有する。

ここでは、Dharmakīrti の基本的な主張のひとつである、「すべての存在は、その本性上、同類・異類と考えられるあらゆるものからの排除を有している」という見解が述べられている。ここで、少なくとも〈他の排除〉の分類を論じる文脈では、Śākyabuddhi が「すべての存在 (sarve bhāvāḥ)」を個別相を指すものとして理解していることがわかる。また、個別相が排除 (vyāvṛtti) を有しているということは Dharmakīrti 自身が主張した点であるが、個別相に対して〈他の排除〉という名称を与えたのはおそらく Śākyabuddhi であつたと考えられる。さらに、この第1の〈他の排除〉として述べられる個別相と語の意味 (śabdārtha) との関わりを考察すると、Śākyabuddhi は「語の表示対象 (vācya) として設定されたのではない」と述べる一方で、「語 (śabda) と証因 (liṅga) に依拠する行為 (vyavahāra) の拠り所として設定された」と述べており、個別相が、概念知に関わる〈語及び証因〉と決して断絶しておらず、後者の拠り所として関係性を保っていると理解されている点は重要である。この点は Śāntarakṣita によって、さらに発展的な解釈が提示されることになる。

ii) 〈他の排除〉のみ

次に Śākyabuddhi が第2の〈他の排除〉として提示しているのは、「純粋な〈他の排除〉のみ」である。この〈他の排除〉は、Śākyabuddhi により、「先の論師たち (pūrvācārya) によって設定された」と述べられる。また、「すべてのものに対して無区別なものとして (sarvatrābhedenā)」と述べられているが、当該箇所の説明のみでは理解が困難である。そこで、当該箇所が引用される AJP に対する Haribhadra による自註 (AJP-svopajñā vyākhyā,

以下 AJPSV) を参照したい。

bhadantadinnabrahṭtibhir vyavasthāpyate — ayam apy aghaṭo na bhavaty ayam apy aghaṭo na bhavatyādinaḥ / (AJP 334, 16-17)

[第2の〈他の排除〉は、] 大徳 Dinna (=Dignāga) などによって設定されたものである。「これもまた壺でないもの(非壺)ではない、これもまた壺でないもの(非壺)ではない」というように。

ここにおいて、Śākyabuddhi 自身の説明ではないけれども、「先の論師」が Dignāga など指すという解説が確認される。また、『これもまた壺でないもの(非壺)ではない、これもまた壺でないもの(非壺)ではない』というように」という説明から、「すべてのものに対して無区別なものとして」とは、〈他の排除〉が個々のもの(=個物)に対して「随伴する観念(anuvṛttipratyaya)」をもたらす働きについて述べていると理解できるだろう。Dignāga が〈他の排除〉を实在論諸学派の主張する普遍(sāmānya)に代わるものとして提示し、また〈他の排除〉が、普遍が有すべき性質を満たすという点を論じていることは、Frauwallner [1959]、服部 [1975]¹¹等によって指摘された通りである。以上、AJPSV の記述を参考に、Śākyabuddhi が「先の論師」としておそらくは Dignāga 等を想定し、Dignāga 等によって説かれた〈他の排除〉を扱っていることを考察した。ただし、ここで、Śākyabuddhi が「先の論師たちによって設定された」と述べるにとどまっているのに対し、Haribhadra は、AJP 本文において、第2の〈他の排除〉に対応する Nyāyavādin (=Dharmakīrti) の議論として、PVIII30 を提示していることに注意しておきたい。PVIII30 を参照しよう¹²。

arthānāṃ yac ca sāmānyam anyavyāvṛttīlakṣaṇam /

yanniṣṭhās ta ime śabdā na rūpaṃ tasya kiñcana // (PVIII30, AJP 334, 6-7)

そして、もろもろの対象が有する普遍(sāmānya)は〈他の排除〉を特質としており、まさにこれらの語はそれ(〈他の排除〉を特質とする普遍)を拠り所としている。[そして、] それ(〈他の排除〉を特質とする普遍)はいかなる性質(rūpa)も持たない。

ここでは、仏教徒自身の見解として、普遍(sāmānya)について論じられている。そして、普遍は、〈他の排除(anyavyāvṛtti)〉を特質とするものであり、いかなる性質(rūpa)も持たないものであると説明されている。Haribhadra は、Śākyabuddhi によって取り上げられた第2の〈他の排除〉を、上記の PV I 30 において述べられる〈他の排除〉に相当すると見なしている。Śākyabuddhi は第2の〈他の排除〉は「先の論師たちによって設定された」と述べるにとどまっているが、Haribhadra の理解にもとづけば、それは必ずしも Dharmakīrti によって認められていないということの意味するものではなく、Dharmakīrti 自身もまたそのような〈他の排除〉の一側面に触れているといえよう。また、Dharmakīrti が、この PVIII30 において、特質を持たない〈他の排除〉と語の関係を論じている点は注意されねばならない。ただし、Śākyabuddhi は、〈他の排除〉の3分類を述べる際、第2の〈他の排除〉と語意の関係に関して触れることはない。

iii) 概念知の顕現

最後に、第3の〈他の排除〉として述べられるのは、「概念知の顕現(vikalpabuddhiprati-

bhāsa)」である¹³。Śākyabuddhi 自身の説明によれば、この概念知の顕現もまた、それによって他のものが排除されることにより、〈他の排除〉として理解されるという。そして、この〈他の排除〉と語意の関係について、この概念知の顕現こそが Dharmakīrti によって語の表示対象 (vācya) として認められたものであると主張される。このように Śākyabuddhi が「概念知の顕現こそが Dharmakīrti の認める語の意味である」と明確に位置づけたことは、Śākyabuddhi 以降の議論の展開を考察する際にも、大きな意味を持っていると思われる。

1-3. まとめ

以上で Śākyabuddhi による議論にもとづき、〈他の排除〉の分類を考察した。そこでは、「他の排除」という語の語義解釈をともなって、3つの側面から〈他の排除〉が捉えられていることがわかる。また、それら3種の〈他の排除〉と語意の関係については、第1の〈他の排除〉として位置づけられる個別相が、「語と証因に依拠する行為の拠る所」として設定されるものとして捉えられており、第3の〈他の排除〉である概念知の顕現こそが Dharmakīrti によって語の表示対象として認められるものだという見解が提示されている。以下では、Śākyabuddhi と同じく〈他の排除〉を3分類することで知られる Śāntarakṣita の議論を考察したい。

2. Śāntarakṣita による3種の〈他の排除〉

Śāntarakṣita は、*Tattvasaṃgraha* (以下 TS) の第16章 (Śabdārthaparīkṣā) において、アポーハ論を論じている。そこにおいて、3種の〈他の排除〉を想定していることは、先に挙げた先行研究の指摘によって、周知のものとなっている。ただし、その内容を検討すると、3種の〈他の排除〉の分類に関しては Śākyabuddhi の解釈と近似しているものの、それらの〈他の排除〉に対する取り扱い、特に語意 (śabdārtha) の設定に関しては、より発展的な解釈が施されていることがわかる。本稿では、これらの点を明らかにするため、Śāntarakṣita の議論を順に確認したい¹⁴。

2-1. 二種の否定の導入

まず、Śāntarakṣita は3種の〈他の排除〉を論じるに先んじて、排除を否定と同一視し、2種の否定の概念を導入する。

tathā hi dvidvidho 'pohaḥ paryudāsaniṣedhataḥ /
dvidvidhaḥ paryudāso 'pi buddhyātmārthātmabhedataḥ // (TS 1003¹⁵)

すなわち、排除 (apoha) は、定立的否定 (paryudāsa) と純粹否定 (niṣedha) とによって、2種である。さらに、定立的否定は、知を本質とするもの (buddhyātman) と対象を本質とするもの (arthātman) という区別によって、2種である。

すなわち、純粹否定と2種の定立的否定を区別することによって、計3種の否定を考えている。ここで、個々の否定がいかなる意味で「他の排除」と呼ばれ、語の意味として設定されるのかを説く伏線として、2種の否定が導入されている点は、注意すべきであろう。

2-2. 3種の〈他の排除〉の説明

次に、Śāntarakṣita は、上記の3つの否定がそれぞれいかなるものとして成立するのかを

説くことによって、計3種の〈他の排除〉を説明する。その際、3種の否定がそれぞれ「他の排除」と呼ばれる根拠が提示されていることは、見逃されてはならない。

i) 知を本質とする定立的否定 (**paryudāsa**) の説明

まず、知を本質とする定立的否定が説明される。この否定は、「概念知に現れる対象の影像 (**arthapratibimbaka**)」であると説明される。

ekapratyavamarśasya ya uktā hetavaḥ purah¹ /
abhayādisamā arthāḥ prakṛtyaivānyabhedinaḥ // (TS 1004)
tān upāśritya yaj jñāne bhāty arthapratibimbakam /
kalpake 'rthātmatābhāve 'py artha² ity eva niścitam // (TS 1005)
pratibhāsāntarād bhedād anyavyāvṛttavastunaḥ /
prāptihetutayāśliṣṭavastudvārāgater api // (TS 1006)
vijātiyaparāvṛttam tatphalaṃ yat svalakṣaṇam /
tasminn adhyavasāyāc ca³ tādātmyenāsyā viplutaiḥ // (TS 1007)
tatrānyapoha ity eṣā sarjñīoktā sanibandhanā / (TS 1008ab)

¹ purah] J; purā P G^{ED} B^{ED}. ² artha] J; arthā P G^{ED} B^{ED}. ³ ca] J P; vā G^{ED} B^{ED}.

アバヤ草などの類のものは、本性上、他との区別を有するものであるが、それらは、先に、[普遍の考察 (**sāmānyaparīkṣā**) 章¹⁶において、] 同一の判断知 (**ekapratyavamarśa**) の根拠であると述べられた。それらに依拠して、概念知に、対象の影像 (**arthapratibimbaka**) が現れる。[それ (対象の影像) は、] 対象を本質とするものではないが、対象であると決め付けられる¹⁷。[それ (対象の影像) は、] ①他の顕現 (= 影像) と異なっており、②他のものから排除された実在 (**vastu**) を獲得する原因であり、また、③ [他のものと] 結合していない実在を通してもたらされる。[そしてまた、] ④個別相は、異類のものから排除されたものであり、それ (対象の影像) を結果とするものであるが、迷乱 [した認識] 者は、それ (個別相) に対して、これ (対象の影像) を、本質関係にあるもの (**tādātmya**) として思い込む。[したがって、] これ (対象の影像) に対して「他の排除」という、このような名称が述べられたことは、根拠のあることである。

ここで、第1の〈他の排除〉は、「概念知に現れる対象の影像」であるとはっきりと述べられている。そして、

- ① 概念知に現れる対象の影像は、それ自体、他の顕現 (= 影像) と異なっている
- ② 概念知に現れる対象の影像は、行為者が他から排除された実在 (= **svalakṣaṇa**) を獲得する原因である
- ③ 概念知に現れる対象の影像は、他と結びつかない実在を通してもたらされる、
- ④ 迷乱した認識者は、概念知に現れる対象の影像を、異類のものから排除された個別相と同一のものとして思い込む

という4つの理由によって、概念知に現れる対象の影像が「他の排除」と呼ばれる根拠が示されている。このことは、語の意味が論じられる際に重要となる。

ii) 対象 (**artha**) を本質とする定立的否定の説明

次に Śāntarākṣita は、対象を本質とする定立的否定を説明する。これは個別相において成り立つものであり、これもまた「他の排除」と呼ばれる根拠を持っているという。

svalakṣaṇe 'pi taddhetāv anyaviśeṣabhāvataḥ // (TS 1008cd)

その〔概念知に現れる対象の影像〕の原因である個別相においても、他からの排除 (viśeṣa) が存在するから、〔「他者の排除」という、このような名称が述べられたことは、根拠のあることである¹⁸⁾〕。

Śākyabuddhi の議論の際にも論じられていたように、個別相はそれ自体、他からの排除 (vyāvṛtti) を有している。Śāntarākṣita もこの Dharmakīrti 以来の理解に従い、個別相が「他の排除」と呼ばれる根拠を説いている。また、「その原因である (taddhetau)」という表現から、〈概念知に現れる対象の影像〉と個別相との間に因果関係が考えられていることは明らかであろう。

iii) 純粹否定 (prasajyapratīśedha, =niśedha) の説明

最後に、Śāntarākṣita は純粹否定について説明する。ここでも純粹否定が「他の排除」と呼ばれることが論じられる。

prasajyapratīśedhaś ca gaur agaur na bhavaty ayam /
ativispaṣṭa evāyam anyāpoho 'vagamyate // (TS 1009)

そして、純粹否定 (prasajyapratīśedha) は、「これは“牛”であって“牛でないもの(非牛)”ではない」というものであり、これ(純粹否定)は、全く明らかなものとして、「他の排除」とであると理解される。

ここにおいて純粹否定は、Śākyabuddhi が説いたような「純粹な(他の排除)」という形ではなく、「これは X であり、X でないものではない」という形の否定として捉えられている。そして、この否定が X でないものの否定である以上、これは〈他の排除〉として理解されるという。

2-3. Śāntarākṣita の設定する3種の語の意味

以上のように3種の〈他の排除〉を説明した後、Śāntarākṣita は語の意味についての論述を行う。ここで注意されるのは、上記の3種の〈他の排除〉のすべてが、語による意味表示/理解という一契機に関わると理解されている点である。このことは、否定理解のプロセスに関する Śāntarākṣita 独自の理解とも大きく関わっている。以下検討してみたい。

i) 直接的な語の意味=概念知に現れる対象の影像

まず、周知のように、第1の〈他の排除〉である概念知に現れる対象の影像が、主要な語の意味であると述べられる。

tatrāyaṃ prathamah śabdair apohaḥ pratipādyate /
bāhyārthādhyavasāyīnyā buddheḥ śabdāt samudbhavāt¹ // (TS 1010)

¹ samudbhavāt] J P G^{ED}; sadudbhavāt B^{ED}.

その〔3種の〈他の排除〉の〕中で、この第1の排除(=概念知に現れる対象の影像)が、諸々の語によって理解させられる。外界対象[である]という思い込みを有した知が、語によって生じるのであるから。

ii) 間接的な語の意味＝純粹否定 (prasajyapraṭiṣedha) 及び個別相 (svalakṣaṇa)

次に, Śāntarakṣita は, 純粹否定及び個別相も, 間接的にはあるが, 語の意味となると述べる. まず, 純粹否定についての議論は, 以下の通りである.

sākṣād ākāra etasminn evaṃ ca pratipādite /
prasajyapraṭiṣedho 'pi sāmārthyena praṭīyate // (TS 1012)
na tadātmā parāmeti (TS 1013a)

直接に, この形象 (=概念知に現れる対象の影像) が, そのように [語によって生み出されるものとして] 理解させられるとき, この本質を持つものは他の本質を持つものではないから, 純粹否定もまた, 間接的に (sāmārthyena, 意味から) 理解される.

ここでは, 純粹否定が間接的に理解されるという Śāntarakṣita 独自の見解が見られる. Śāntarakṣita は, 純粹否定は概念知に現れる対象の影像が理解された場合に, 間接的に理解されるものであるという見解を提示する. それに関する Śāntarakṣita の議論を参照しておきたい.

tasya ca pratibimbasya gatāv evāvagamyate /
sāmārthyād anyaviśeṣo nāsyāyātmakatā yataḥ // (TS 1018)
divābhojanavākyāder ivāsyāpi phaladvayam /
sākṣāt sāmārthyato yasmān nānvayo 'vyatirekavān // (TS 1019)

そのような影像 (pratibimba) が理解された場合, 間接的に (他の排除) が理解される. なぜならば, これ (影像) は, 他の本質を持つことはないからである. 「[[太ったデーヴァダッタは] 昼に食事をしない] という文などのように, 直接的・間接的に二つの結果を持つ. 否定的随伴関係を持たない肯定的随伴関係はないからである.

ここでは「太ったデーヴァダッタは昼に食事をしない」という論理的要請 (arthāpatti) の説明において典型的に用いられる例を使用して, 否定理解のプロセスを論じていることは明らかであろう. 以下では, もうひとつの (他の排除) である個別相についての議論を参照したい.

sambandhe sati vastubhiḥ /
vyāvṛttavastvadhigamo 'py arthād eva bhavaty ataḥ // (TS 1013b-d)
tenāyam api śabdasya svārtha ity upacaryate / (TS 1014ab)

諸々の実在と [因果関係を特質とする, 間接的な¹⁹⁾ 結合関係がある場合, これによって, [異類のものから排除された] 実在の理解もまた, 間接的に (arthād, 意味から) 存在する. したがって, [純粹否定と同じく⁹⁾ これ (個別相) もまた, 語の固有の対象 (svārtha) であると二次的に表現される (upacaryate).

(概念知に現れる対象の影像) が説明される際, 個別相と影像の関係について触れられていた. ここではそのような結合関係にもとづいて²⁰⁾ 語により個別相もまた間接的に理解されると述べている. ただし, この 2 種の (他の排除) が直接語によって表示されるものではないことは, Śāntarakṣita も意識している

na tu sākṣād ayaṃ śabdair¹ dvidvidho 'poha ucyate // (TS 1014cd)

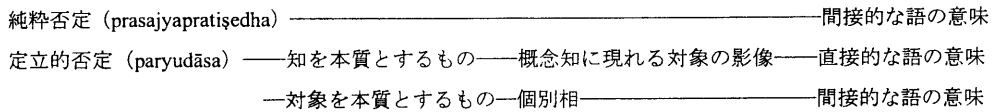
¹ śabdair] J P; śabdo G^{ED} B^{ED}.

しかし、これら2種の排除(=純粹否定と個別相)は、諸々の語によって直接に表示されることはない。

2-4. Śāntarakṣita による3種の〈他の排除〉理解とそれにもとづく語意の設定

以上、Śāntarakṣita による3種の〈他の排除〉をめぐる議論を考察した。そこでは、Śākyabuddhi と近似した枠組みを取りながらも、3種の〈他の排除〉がすべて語の意味となり、語による意味表示/理解の契機に関わるという、Śāntarakṣita 独自の〈他の排除〉理解が確認できたと思われる。以上の点をまとめれば、図1のようになる。なお、ここで注意されるべきことは、語による意味表示/理解において、語意における差異の理解をもたらすのは、間接的に理解される純粹否定であるという点である。また、Śāntarakṣita は3つの語意全てに対して「他の排除」と呼ばれる根拠を説いていたことも注意されねばならない。従来、Śāntarakṣita が〈概念知に現れる対象の影像〉を主たる語の意味として捉え、「他の排除」というのはその影像に対して与えられる名称に過ぎないことは指摘されてきた。しかし、上記の検討にもとづいてより厳密に言えば、Śāntarakṣita は3種の語意すべてについて「他の排除」と呼ばれる根拠を説いており、それによって「語の意味は〈他の排除〉である」という Dignāga 以来の定説を擁護したと考えられるのである。

【図1】



3. Śākyabuddhi と Śāntarakṣita の理解の比較

ここで改めて Śākyabuddhi と Śāntarakṣita の理解を比較してみたい。まず、両者が〈他の排除〉を3分類する点は共通している。そして、個々の〈他の排除〉について比較した場合、①「個別相」と「個別相」、②「純粹な〈他の排除〉のみ」と「純粹否定」、③「概念知の顕現」と「概念知に現れる対象の影像」が対応すると言える。そのうち、①と②については、その内容も同じとあって差し支えない。しかし、②の「純粹な〈他の排除〉のみ」と「純粹否定」に関しては、Śākyabuddhi は「先の論師たちによって説かれた〈他の排除〉」と説明しているのに対し、Śāntarakṣita は「これは X であり、X でないものではない」という形の否定(純粹否定)と捉えており、その内容は異なっている²¹。さらに、語の意味については、Śākyabuddhi が、「個別相は、語の表示対象としてではなく、語と証因に依拠する行為の拠り所として設定されるものである」と捉え、概念知の顕現こそが Dharmakīrti によって語の表示対象として認められるという見解を提示しているのに対し、Śāntarakṣita は、語による意味表示/理解の一契機に3種の〈他の排除〉の全てが関わり、直接的、間接的という差はあるものの、全てが語の意味となると考えている。そして、この理解と表裏のものとして、否定(純粹否定)は、概念知に現れる対象の影像という肯定的なものが理解さ

れた後、間接的に理解されると主張するに至ったと思われる。このように、Śākyabuddhi と Śāntarakṣita は、ほぼ同様の「3種の〈他の排除〉」という枠組みを提示しながらも、意味論としては、Śāntarakṣita において、より発展的な解釈が見られるのである。

III. まとめ

以上の考察から、Śāntarakṣita は Śākyabuddhi によって説かれた3種の〈他の排除〉という枠組みに従いながらも、語の意味の設定という点では、より発展的な議論を提示していることが明らかになった。それは、Śāntarakṣita が3種の排除を、語による意味表示／理解の一契機に全て含まれるものとして捉えたことに起因するものである。そしてその結果、概念知に現れる対象の影像という肯定的なものが理解された後、純粋否定が間接的に理解されるという理解がなされることになった。本稿では〈他の排除〉を3分類する Śākyabuddhi と Śāntarakṣita を取り上げたが、このような〈他の排除〉の3分類は、後代の議論を参照した場合、必ずしもそのまま採用された訳ではないわかる。それら後代の議論については、稿を改めて論じることとしたい。

【appendix】

〈sanskrit text〉

ayam atrārthaḥ / trividho hy anyāpohaḥ¹ / ekas tāvat vyāvṛttaṃ svalakṣaṇam eva, anyo 'pohyate 'sminn iti kṛtvā¹ / yad adhikṛtyāha² –

svabhāvaparabhāvābhyām yasmād vyāvṛttibhāginah //³

iti / ayam³ ca śabdalingāśrayasya vyavahārasyāśrayatvena vyavasthāpyate / na tu śabdavācayatayā / anyavyavacchedamātraṃ dvitīyaḥ, anyāpohanam⁴ anyāpoha⁵ iti⁶ kṛtvā^{II}, yaḥ sarvatrābhedenā pūrvācāryaiḥ vyavasthāpyate, pratiśedhamātrasya sarvatrāviśeṣāt⁷ / vikalpabuddhipratibhāsa tu tṛtīyaḥ, anyo 'pohyate 'neneti kṛtvā^{8,III}, yo 'yaṃ śāstrakārasya⁹ śabdavācayatayābhimataḥ¹⁰ /

ⁱ PV I 40. Cf. PVSV 24, 19.

¹ Cf. PVSVT ad PV I 41: svalakṣaṇam tv apohyate 'sminn ity apoha ucyate / PVSVT 114, 21; Vibhūticandra's Marginal Note: apohyate 'smin svalakṣaṇam vāpohaḥ / PVV 304, fn. 4.

^{II} Cf. PVSVT ad PV I 41: anyanivṛttimātraṃ tv arthād ākṣiptam apohanam apoha ity ucyate / PVSVT 114, 20.

^{III} Cf. PVSVT ad PV I 41: kalpitaś cākāro 'pohāśritatvād apoha ucyate / apohyate 'neneti vā / PVSVT 114, 19-20; Vibhūticandra's Marginal Note: apohyate 'neneti bāhyatayāropita ākaraḥ / PVV 304, fn. 4.

¹ anyāpohaḥ] *em.*; anyā(po)haḥ MS Jb2; gzhan sel ba ni T(D200b3, Q229a5). Cf. 'pohaḥ AJP 333, 7.

² tāvat vyāvṛttaṃ ... adhikṛtyāha] *em.*; tāva .y /// [Jb3] /// ..ha / MS Jb2-3; re zhig gcig ni 'di las gzhan dang gzhan sel

bar byed pa'i phyir rang gi mtshan nyid bzlog (D; zlog Q) pa kho na yin no // gang gi dbang du mdzad nas / T(D200b3, Q229a5). Cf. ekas tāvad vyāvṛttam svalakṣaṇam eva, anyo 'pohyate 'sminn iti kṛtvā, yad adhikṛtyāha AJP 333, 7-8.

³ yasmād vyāvṛtti° ... ayam] *em.*; yasmā(d v)yā[v]ṛti. + + + + .. yaṃ MS Jb3; ldog pa la ni brten pa can // zhes bya ba gsungs so // 'di T(D200b3-4; Q299a6). Cf. yasmād vyāvṛttibhāginah" iti / ayam AJP 333, 9-10.

⁴ anyāpohanam] anyāpohanam MS^{pc} Jb3; anyāpohanam anyāpohanam MS^{ac} Jb3; gzhan gcod pa'i phyir T(D200b4, Q229a7). Cf. anyāpohanam AJP 334, 3.

⁵ anyāpoha] MS Jb3; *n.e.* T(D200b4, Q299a7). Cf. anyāpoha AJP 334, 3.

⁶ iti] *em.*; i(ti) MS Jb3; phyir T(D200b4, Q299a7). Cf. iti AJP 334, 3.

⁷ sarvatrāviśeṣāt] *em.*; sarvva.. i ṣāt* MS Jb3; thams cad la khyad par med pa T(D200b5, Q229a7). Cf. sarvatrāviśeṣāt AJP 334, 4.

⁸ vikalpabuddhi° ... kṛtvā] *em.*; vikalpa /// MS Jb3-4; 'dis gzhan sel bar byed pa'i phyir nram par rtog pa'i blo la snang ba'i phyir te / T(D200b6, Q229a8). Cf. vikalpabuddhipratibhāsa tu trṭiyāḥ, anyo 'pohyate 'neneti kṛtvā AJP 334, 8-9.

⁹ yo 'yaṃ śāstrakārasya] *em.*; /// [Jb4] /// ... [k]ārasya MS Jb3-4; gang bstan bcos mdzad pas sgra'i brjod par bya ba nyid du bzhed pa zhes bya ba 'di yin no T(D220b5-6, Q229a8). Cf. ayam ca AJP 334, 9.

¹⁰ śabda°] MS Jb4; śabda° The transcription in Inami et al. [1992]; sgra'i T(D220b5, Q229a8). Cf. śabdasya nibandhanatayā° bhyupagamyate AJP 334, 9.

〈Tibetan text〉

[D200b3] 'dir ni gzhan sel ba ni nram pa gsum yin te / re zhig gcig ni 'di las gzhan dang gzhan sel bar byed pa'i phyir rang gi mtshan nyid bzlog (D; zlog Q) pa kho na yin no // gang gi dbang du mdzad nas /

mthun dngos [Q229a6] gzhan gyi dngos dag la //

ldog pa la ni [D200b4] brten pa can //

zhes bya ba gsungs so // 'di yang sgra dang rtags la brten pa'i tha snyad kyi rten nyid du nram par bzhag (Q; gzhag D) pa yin gyi sgras brjod par bya ba nyid du ni ma yin no // gnyis pa [Q229a7] ni gzhan gcod pa'i phyir gzhan nram par gcod pa tsam yin zhing / gang sngon gyi slob dpon (D; ma Q) [D200b5] dag gis thams cad la khyad par med pa nram par bzhag (Q; gzhag D) pa yin te / thams cad la dgag pa tsam la khyad par med pa'i phyir ro // [Q229a8] gsum pa ni 'dis gzhan sel bar byed pa'i phyir nram par rtog pa'i blo la snang ba'i phyir te / gang bstan bcos mdzad pas sgra'i brjod par bya ba nyid du bzhed [D200b6] pa zhes bya ba 'di yin no //

〈略号及び使用テキスト〉

AJP *Anekāntajayapatākā* of Haribhadra Sūri. *Anekāntajayapatākā* by Haribhadra Sūri with his own commentary and Muncandra Sūri's supercommentary, vol. 1, ed by H. R. Kāpadī,

- Gaekwad's Oriental Series 88, Baroda, 1940.
- B^{ED} *Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary Pañjikā of Shri Kamalaśīla*, ed. by S. D. Shastri, vol. 1, Bauddha Bharati Series 1, Varanasi, 1968.
- D Derge edition of Tibetan Tripiṭaka.
- G^{ED} *Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*, ed. by E. Krishnamacharya, 2vols, Gaekwad's Oriental Series 30, Baroda, 1926.
- J Jaisalmer manuscript of TS. *Jaisalmer Cat.* No.377.
- JNA *Jñānaśrīmitranibandāvalī. Buddhist nyāya works of Jñānaśrīmitra*, ed. by A. Thakur, Tibetan Sanskrit Works Series 5, Patna, 1959. (2nd ed., Patna, 1987.)
- P Pāṭaṇa manuscript of TS. *Pāṭaṇa Cat.* No.6679.
- PVP *Pramāṇavārttikapañjikā* of Devendrabuddhi. D No. 4217, Q No. 5717.
- PVSV *Pramāṇavārttikasvavṛtti* of Dharmakīrti. *The Pramāṇavārttika of Dharmakīrti, the first chapter with the Autocommentary. Text and Critical notes*, ed. by R. Gnoli, Roma, 1960.
- PVSVṬ *Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā* of Karṇakagomin. *Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇavārttikam (svārthānumānaparicchedah) svopajñāvṛtyā, Karṇakagomiviracitayā tatṭīkayā ca sahitam*, ed. by Rāhula Sāṅkṛtyāyana, Allahabad, 1943. (Repr. under the title of *Karṇakagomin's commenatry on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti*, Kyoto: Rinsen Book Co.,1982)
- PVṬ *Pramāṇavārttikaṭīkā* of Śākyabuddhi. D No.4220, Q No.5717.
- PVV *Pramāṇavārttikavṛtti* of Manorathanandin. *Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇavārttikam ācārya-Manorathanandikṛtayā vṛtyā saṃvalitam (Dharmakīrti's pramāṇavārttika with a commentary by Manorathanandin)*, ed. by Rāhula Sāṅkṛtyāyana, Appendix to *Journal of Bihar and Orissa Rsearch Society* 14-16, Patna, 1938-40.
- Q Peking edition of Tibetan Tripiṭaka.
- RNA *Ratnakīrtinibandhāvalīḥ. Buddhist nyāya works of Ratnakīrti*, ed. by A. Thakur, Tibetan Sanskrit Works Series 3, Patna, 1957. (2nd ed., Patna, 1975.)
- TS *Tattvasaṅgraha* of Śāntarakṣita. See B^{ED} G^{ED}.
- TSP *Tattvasaṅgrahapañjikā* of Kamalaśīla. See B^{ED} G^{ED}.

(注記)

¹ アポーハ論の3段階発展説と密接に関連する Vidhivādin, Pratiṣedhavādin という区別に関しては, Akamatsu [1986] によって詳細に再検討されている。

² 櫻井 [2000b] においても, 船山徹氏の指摘にもとづき, アポーハの3分類が取り上げられている。 Cf. 櫻井 [2000b] p. 27, 13-p. 28, 31.

³ Cf. PV I 168: nivṛtter niḥsvabhāvatvān na sthānāsthānakalpanā / upaplavaś ca sāmānyadhiyas tenāpy adūṣaṇā // PVSV 85, 21-24.

⁴ Cf. Dunne [2004] p. 131, 16-p. 132, 22, 櫻井 [2000b] p. 27, 18-p. 28, 11.

⁵ 船山 [2000] p. 121, 9-p. 122, 8, 特に注 (45) 参照。ただし, 後注ということもあり, サンスクリットテキストの復元及び和訳はされていない。 AJP 及び AJPSV の当該箇所は, 櫻井 [2000b] 註⑨に和訳されている。

⁶ 和訳の中に反映させていない偈文の“yasmāt”は、PV I 41 中の“tasmāt”と対応する。 Cf. PV I 41: tasmād yato yato 'rthānāṃ vyāvṛttis tannibandhanāḥ / jātibhedāḥ prakalpyante tadviśeṣāvagāhinaḥ // PVSV 24, 20-21.

⁷ これら 3つの語義解釈から容易に連想されるのは、Ratnakīrti が *Apoḥasiddhi* 冒頭に述べる〈他の排除〉の 3つの語義解釈である。Ratnakīrti が Śākyabuddhi をはじめとするこれらの議論を意識していることは明らかであろう。Ratnakīrti の師といわれる Jñānaśrīmitra もまた、これらの語義解釈の一部に触れている。 Cf. RNA 58, 5-8, JNA 202, 12-13.

⁸ PV I 40 解釈については、吉水 [1999] を参照した。

⁹ Cf. PVSV ad PV I 40-42: tac cātmani vyavasthītam amiśram eva / PVSV 25, 2-3.

¹⁰ Cf. PVSV ad PV I 40-42: tasmād ime bhāvāḥ sajātīyābhimatād anyasmāc ca vyatiriktāḥ svabhāvenaika rūpāt vāt / PVSV 25, 13-15.

¹¹ Cf. 服部 [1975] p. 5, 18-26, fn. 5.

¹² PV 第 3 章全体の翻訳研究として、戸崎 [1979] がある。 Cf. 戸崎 [1979] p. 95, 10-14.

¹³ この第 3 の〈他の排除〉である〈概念知の形象〉に関して、Śākyabuddhi は Dharmakīrti の言明を根拠として提示していない。また、当該箇所を引用する Haribhadra もまた、AJP 及び AJPSV において、Dharmakīrti の主張を引用することはない。したがって、当該箇所における議論を根拠に Dharmakīrti のテキストに遡ることはできない。ただし、Kamalaśīla は、TSP において、〈知の [内面にある] 対象 (buddhiviśaya)〉を語意として認める文法学派の見解と、〈知の形象 (buddhyākāra)〉を語意として認める仏教徒 (アポーハ論者) の見解の差異を論じるが、その際、仏教徒の主張の根拠として、Dharmakīrti の偈を引用している。そこにおいて引用されるのは、PVIII 169 である。PVIII 169 は以下の通りである。「しかし、その (= 外界対象に成り立つ排除) 性質を付託して認識することによって、他から排除されたもの (実在、個別相) を認識する。[したがって、] 語の意味はそれ (知の形象) であると述べたとしても、矛盾することは無い。」(tadrūpāropagatyānyavyāvṛttādhigateḥ punaḥ / śabdārtho 'rthaḥ sa eveti vacane na virudhyate // PVIII 169) Cf. B^{ED} 352, 7-8. なお、TSP の当該箇所の和訳として服部 [1993] があり、同じく当該箇所の議論は Ogawa [1999] にも取り上げられている。 Cf. 服部 [1993] p. 371, 3-9.

¹⁴ 本稿では TS の議論を中心に扱い、補助資料として TSP を用いることとする。なお、TS 1003-1006bcd, 1008cd, 1013bcd-1014ab については、櫻井 [2000b] によって和訳されている。

¹⁵ TS の偈番号は、B^{ED} に従う。

¹⁶ Cf. TS 722-725: B^{ED} 296, 7-297, 2.

¹⁷ Cf. TSP ad TS 1004-1005: niścitam ity adhyavasitam B^{ED} 391, 11.

¹⁸ Kamalaśīla の註釈にもとづいて補う。この補いは文脈上から考えた場合も、妥当なものであろう。 Cf. B^{ED} 391, 23-392, 7.

¹⁹ Cf. TSP ad TS 1013-1014: tatra sambandhaḥ śabdasya vastuni pāramparyeṇa kāryakāraṇalakṣaṇaḥ pratibandhaḥ / B^{ED} 393, 18-19.

²⁰ Kamalaśīla は、実在の直接経験、発話意欲 (vivakṣā)、口蓋等の振動、語という間接的な関係を想定している。 Cf. TSP ad TS 1013-1014: B^{ED} 393, 19-20.

²¹ この点に関して、Karmakagomin (9-10C) が Śākyabuddhi と Śāntarākṣita の説を併記していることは興味深い。なお、Karmakagomin が Śākyabuddhi のテキストを利用して PVSV に註釈を著していることは、Steinkellner [1981] に指摘されており、Karmakagomin が Śāntarākṣita の偈を引用していることは、Akamatsu [1981] に示唆されている。Karmakagomin は以下の

ように述べる。「他方〔他の排除〕は、〈他の否定のみ (anyanivṛttimātra)〉であり、間接的に (arthād, 意味から) 理解される。そして、この〈他の否定のみ〉[という〈他の排除〉]は、固有の特質を欠いているから、このような非難は [ありえ] ない。あるいは、師によって認められた [他の排除] は、固有の本質を欠いているので、存在しないから、[このような非難はありえない] という意味である。」 (aparo 'rthād yat pratīyate 'nyanivṛttimātram / yac caitad anyanivṛttimātram, tasya niḥsvabhāvatvān naitac codyam / ācāryeṇa vā yad abhimatam, tasya niḥsvabhāvatvād abhāvād ity arthaḥ / PVSVT 327, 17-19) なお, Karnakagomin は〈他の排除〉は 2 種であるという見解を提示している。この問題は別の機会に論じることとしたい。

(参考文献)

- 小川英世 [1981] ジュニャーナシュリーミトラの概念論, 『哲学』 33, pp. 67-80.
- 櫻井良彦 [2000a] ダルマキールティの概念論, 『印仏研』 48-2, pp. (56)-(58).
- [2000b] Dharmakīrti, Śākyabuddhi, Śāntarakṣita の Apoha 論, 『龍谷大学大学院文学研究科紀要』 22, pp. 39-58.
- 戸崎宏正 [1979] 『仏教認識論の研究』 上巻, 東京: 大東出版社.
- 服部正明 [1975] Mīmāṃsāslokavārttika, Apohavāda 章の研究 (下), 京都大学文学部研究紀要, No.15, pp. 1-63.
- [1993] Tattvasaṃgraha X VIに見られる Vākyapādiya II からの引用詩節, 『塚本啓祥教授還暦記念論文集 知の邂逅—仏教と科学』 pp. 365-375.
- 船山 徹 [2000] カマラシーラの直接知覚論における「意による認識」(mānasa), 『哲学研究』 569, pp. 105-132.
- 吉水千鶴子 [1999] Pramāṇavārttika I 40 の解釈について, 『印仏研』 47-2, pp. (97)-(101).
- Akamatsu, A. [1981] Karṇakagomin and Śāntarakṣita, on thirteen kārikās common to the *Pramāṇavārttikasvavṛttīkā* and the *Tattvasaṃgraha*, *Indo Gakuho (Indological Review)*, No. 3, pp. 53-58.
- [1986] *Vidhivādin et Pratiśedhavadin: double aspect présenté par la théorie sémantique du bouddhisme indien*, *ZINBUN* 21, pp. 67-89.
- Dunne, J. [2004] *Foundations of Dharmakīrti's Philosophy*, Wisdom Publications, Boston.
- Frauwallner, E. [1932] Beiträge zur Apohalehre I. Dharmakīrti. Übersetzung, *WZKM* 39, pp. 247-285.
- [1959] Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung, *WZKSO* 3, pp. 83-164.
- Hattori, M. [1980] APOHA AND PRATIBHĀ, *Sanskrit and Indian Studies, Essays in Honor of Daniel H. H. Ingalls*. Dordrecht, pp. 61-73.
- Herzberger, R. [1986] *Bhartrhari and the Buddhists, An Essay in the Development of Fifth and Sixth Century Indian Thought*, Dordrecht: Holland.

Inami et. al. (Inami, Tani, and Matsuda)

- [1992] *A Study of Pramāṇavārttikaṭikā from The National Archives Collection, Kathmandu, Part I*, Sanskrit Fragments Transcribed, The Toyo Bunko: Tokyo.
- Katsura, S. [1986] *Jñānaśrīmitra on Apoha, Buddhist Logic and Epistemology*, ed. by B. K. Matilal and R. D. Evans, Dordrecht: Holland, pp. 171-183.
- [1991] *Dignāga and Dharmakīrti on apoha, Studies in the Buddhist Epistemological Tradition*, ed. by Ernst Steinkellner, Wien, pp. 129-146.
- Mookerjee, S. [1935] *The Buddhist Philosophy of Universal Flux*, Calcutta, (repr. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 1997).
- Ogawa, H. [1999] *Bhartṛhari on Representations (buddhyākāra), Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy*, ed. by Katsura Shoryu, Wien, pp. 261-286.
- Steinkellner, E. [1981] *Philological remarks on Śākyamati's Pramāṇavārttikaṭikā, Studien zum Jainismus und Buddhismus, Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*, Hrsg. von Klaus Bruhn und Albrecht Wezler, Wiesbaden, pp. 283-295.

2004. 12. 17 稿

いしだ ひさたか 東京大学大学院博士課程

The classification of *anyāpoha*:
The three-type classification by Śākyabuddhi and Śāntarakṣita

Hisataka ISHIDA

It is well known that Śākyabuddhi and Śāntarakṣita adopted the three-type classification of *anyāpoha* (exclusion of others). However, the difference between them and the fact that this classification was refuted by later scholars has not been discussed in detail. Therefore, this article tries to clarify the difference between them.

First, the classification by Śākyabuddhi is examined. In the process of this, the original sanskrit text of *Pramāṇavārttikaṭīkā* is partly reconstructed and we can have a more accurate understanding of his discussions. He proposes three *anyāpohas*: 1. excluded particulars (*vyāvṛttasvalakṣaṇa*), 2. mere other-exclusion (*anyanivṛttimātra*), 3. the appearance in a conceptual cognition (*vikalpabuddhipratibhāsa*). According to his explanation, the first *anyāpoha* (excluded particulars) is what is established as the basis of practical actions through language and inferential marks, the second *anyāpoha* (mere other-exclusion) is what is explained by old teachers, and the third *anyāpoha* (the appearance in a conceptual cognition) is what the author (=Dharmakīrti) of the treatise (=Pramāṇavārttika) accepts as the object expressed by words.

Next, Śāntarakṣita also adopts a three-type classification of *anyāpoha*: 1. the reflection of objects (*arthapratibimbaka*) in conceptual cognition, 2. particulars (*svalakṣaṇa*), 3 simple prohibition (*prasajyapratīṣeḍha*). However, it is characteristic of him that he accepts all three *anyāpohas* as the meaning of words. He insists that the first *anyāpoha* (the reflection of objects) is the principal meaning of words. Further, the second *anyāpoha* (particulars) can also become the subsidiary meaning of words, because it has an indirect relationship with the reflection of objects (=the first *anyāpoha*) and is realized when the reflection of objects is cognized. The third *anyāpoha* (simple prohibition) is also explained as being the subsidiary meaning of words, because it brings the realization of difference in the meaning of words and it is understood by implication (*arthāt*) after the reflection of objects is cognized.

As a result of this study, it has become clear that Śākyabuddhi and Śāntarakṣita adopt almost the same structure to classify the *anyāpoha*, but Śāntarakṣita proposes a more developed understanding concerning the meaning of words. Śāntarakṣita insists that all of the three *anyāpohas* become the meaning of words and are expressed in a chance of denotation. As a result of this understanding, his unique theory, that the negation is understood by implication, seems to have been adopted.